仲々死なぬ彼奴

海野十三

青空文庫

一

大熊老人にとって、凡そ不思議な存在は、少年喜助であった。

喜助君なら、今でも一緒に抱いて寝てやってもよいと思っているのであった。今年廿二歳になって、たいへん大人びてきた喜助君の方でも、抱かれることには大いに賛成であろうと思われる。

大熊老人といえば、あの人かと誰でもがすぐ思い出すほどの金満家であった。八十二歳になるというのに、腰一つ曲らず、流石に頭髪だけは霜のように真白になっては居るが、肉付は年増女房を思わせるほど豊満で、いつも赭顔をテラテラさせているという、怖るべき精力老人であった。

財産は五億円だとも云い、一説にはそれほどは無いが、すくなくとも一億円は越えているだろうと噂された。政党、ことに××党にとってこの老人は文字どおりの弗箱であったからして、大臣になったことは無いが、その巨大なる財力は常に到るところで物を言った。現に××内閣で帆をあげている大蔵大臣の如きは、実力に於て首相を凌ぐと取沙汰されているのも、実はといえば、この大熊老人が特に大蔵大臣の尻押しをしているからであった。大熊老人の鼻息の荒いもう一つの理由は、老人は三十年此の方、独身であり、そのうえ老人には一人の子供も無論孫も無い、全くの孤独者であったことである。自然、老人は我儘にもなり、ヒステリーにもならざるを得なかった。

老人には子供はないけれども、親戚は随分と多かった。彼等は常に老人の周囲に出没して、何やかやと世話を焼きたがった。中には親戚というには、余りに縁の遠いものまで交っている始末であって、そういう者に限り、特に親切を老人に売りこみたがった。実際彼等多くの親戚が、この気むずかし屋の癇癪もちの動物的な汚れが浸みこんでいるように見える老人の周囲に出没するのは何も心から、この一人ぼっちの老人を慰めてやろうという意志から出たものではなく、なんとかこちらの親切を認めて貰って、遺産分配の比率を高くして貰おうという魂胆から出発していることは明白であった。老人の気むずかしくなるのも、こうした一面から見て無理のないことであった。

大熊老人は、今までに随分沢山の人を世話したけれど、どれも老人の気に入るようなのはなかった。唯一人、それは唯一人だけ、前に言った喜助だけが気に入りであった。

「お前は一生懸命に勉強して、豪いものになるんだぞ。お金のことなんか考えずに、いいと信じたことをドンドンやってのけなさい。そうすると、お金なんか向うの方から自然に飛びこんで来る。それには若いうちにウンと苦労をするに限る。苦労を積まない人間は駄目じゃ。人から貰う金は、自分を堕落させるばかりじゃ。このわしはナ、お前が大好きじゃから、ある程度の世話はしてやるが、わしの財産は一文も分けてはやらぬぞ。わしはお前に依頼心を起して貰いたくないのじゃ。お前をデクノ棒にしたくないのじゃ。財産を一文も分けてやらぬ好意を、よく胸に畳んで忘れて呉れるでないぞや」

老人は、喜助に対して、いくたびとなく、此の訓戒を試みた。喜助は老人の好意を、実質以上に高く高く感じて、その都度、泪をホロホロ流して喜んだ。

喜助は幼にして両親を喪い、叔父の家にひきとられて生長したの

だったが、その叔父の久作の家というのが、大熊老人のお邸へ出入りする花屋だった。その因縁から、喜助が大熊老人に知られるようになったのである。

喜助が小学校を卒業すると、大熊老人は彼を薬学校に入れた。喜助の成績は老人の期待を裏切って、上等とはゆかなかった。さりとて悪いというほどのところでもなかった。恐らく、それは喜助のお人よしに原因するところが多いのだろうと、老人は自ら安んじたことであった。学校を出た喜助は、老人の骨折で、理化学研究所へ入って、無機化学実験室の助手をつとめることになったのである。

彼は小石川の御殿町にある大熊邸門前の花久の二階から、毎朝テクテク歩いて、二十町もある理化学研究所に通った。夜は、毎晩のように老人の許を訪い、彼がやって居る研究の話や、学界がどんな問題を持ってどんな方向へ動いてゆくかなど、老人には至極わかり憎い話をして聞かせるのであったが、老人は一向閉口しないで其の判らない話のつづきを聞きたがった。

大熊老人も、喜助少年も、こうして毎日を至極幸福に平和に暮していた。それは金銭問題を離れた、神か大愚かというような清浄な生活だった。このような泪ぐましい情景は、末永く二人の上に止っているように誰しもが祈りたいところであるが、筆者は文章を売るため心を鬼にして、ここに突如として降って湧いたようなカタストロフィーについて述べなければならない。

二

日頃元気な大熊老人が、一週間ほどこっちへ、どうも何だか気分がすぐれないと云って、床についた。

老人が病床に横わると、即日といわず、即時から親戚の者共が大騒ぎを始めた。花を毎日取りかえる者があり、銀座裏の上方料理のうまい家から、凝りに凝った料理を作らせては老人にとどけるものもあった。何処からとりよせたか、果物の王様といわれるマンゴーの生々したのを老人の枕頭に供えるものもあった。日頃健啖な大熊老人は、それ等の届けものの食料品を、とに角一と通りは味わってみるのであった。

中には、老人の箸のつけ方が少かったといって悲観するものがあるやら、あの果物がすくなくとも五万円に売れたろうと胸算用をする者もあった。

喜助は老人が病気になると、すぐさま勤めを休み、枕頭につめきって介抱をした。看護婦のよく行きとどいた世話振りよりも、喜助のヘマな手伝いの方が、どんなにか老人を喜ばせたり、元気づけたりしたかしれなかった。老人がいつになく枕があがりそうもない様子であるのを見てとると、喜助には大熊老人がいよいよ懐しいものに思われて来た。老人の容態が一歩悪化すると、喜助の食慾も一椀がところ減退した。彼は科学者の教育をうけたに似ず、心の中で心あたりのある明神様だとか、観音様などを、それからそれへと、いくつも並べ唱えては、老人が全快に向うことを祈った。しかしその効目はすこしも現れて来る模様がなかった。もしや、老人が此儘死んでしまうようなことがあれば、自分はどんなに淋しい身の上になることであろうか、それは帰るべき塒を失った仔鳥よりも、いく段か不見目であろうと思われる。仔鳥にはどこかに友達があるが、彼には凡そ力になって呉れる人物など見当らなかった。彼は恐怖に似

た魔物が、背後の真暗からジワジワと忍びよってくるその衣ずれの音を、ハッキリ聞きわけることができるようになった。

梅雨空に重い雲が渦をなして老人の病室近くに舞い下り、枕許につめている人々は、煌々たる電灯の明るさに、昼と夜との錯覚をひきおこすようなことになった或る不気味な日の午後、大熊老人は全く意識不明に陥り、やがてその夕刻、脈膊も薄れて、眠るが如く大往生を遂げてしまった。

喜助少年は、今や前後を忘却して、大声をあげて、泣き喚きながら、老人の亡骸に縋りついた。

「おじいさん。おじいさァん。どうして死んだんです。しっかりして下さァい。もう一遍生きて下さい。冷くなっちゃいやだなァ。よオ、おじいさん、しっかりして下さァい！」

「オイ君、止さないかッ」

突然、頭の上で太い声が怒鳴った。喜助にはそんな声なんか、アルゼンチンでしているようなものだった。喜助が一向その声を聞き入れないのを見ると、太く逞しい腕が四本ばかり、グッと伸びてきて喜助の頸筋をつかんで、その身体を軽々とひっかつぐと、宙を渡らせて、エイヤッ、ドタリと、次の間の畳の上に投げとばした。

「ウワーン、痛いよ、乱暴な！」

喜助は、不意打を喰って、しばらく息が止っていた。顔をあげると、老人の亡骸を遮るようにして一団の人々が刑務所の高塀のように厳めしく立ち並んでいた。

「……」

「お前は何者だ」と喜助の面前に調子の荒っぽい言葉が飛んだ。

「お前は大熊家にとって何者なんだよォ。ここは他人は一切入れないことに決定た。親族会議の決議だ。お前はサッサと出て行って、二度と当家の門をくぐって貰っては困る」

「でも、僕は……」

「ダ、ダ、黙れ！　他人は帰ってもらいたい。それでも入って来ると、法律で警察へつき出すから、そう思え」

喜助は、そんな乱暴な口を利いている男の顔をはじめてマジマジと見上げて、大いに驚いた。それは四五日前までは、毎日のように彼のところへ来ては、老人へのよき執成を、蒼蠅いほど頼んでいた千石虎之進という、死んだ老人の末弟に当る男であった。彼は若い時分から、すこぶる道楽に身を崩し、詐偽のための前科もある三百代言であった。それに連る男女の一群は、いわずと知れた親族と称する実は遺産目当てのたかり連中であった。

「他人は帰れ！」

の一言に、喜助は述べてみたい理窟もないではなかったが、言い出したが最後、今度は肋骨の一本ぐらいは折られそうな一同の権幕に恐れをなして、唯下唇をブルブルふるわせるばかりで、すごすごと退場しなければならなかった。

喜助は、重い足をひきずるようにして、叔父の家の二階へ、帰って行った。

三

二階の薄汚い彼の居間に入ると、彼は、耐えとおして来た悲しさと口惜しさとを一時に爆発させて、側らの硝子戸がビリビリ鳴り出したように思われるほど、大声を挙げて、泣いて泣いて泣きまくっ

た。この室こそ彼にとって独占の天下であった。そこには誰も入ってくるものがなかった。叔父や叔母たちには彼の泣き声が耳に入らぬではなかったが、明日にさし迫った大熊老人の葬儀に供えるための、大青竹の花筒を急造したり、山のように到着した榊や花を店前に下ろしたり、それに続いて、その大花筒に花をさしわけたりする仕事のために、一分とその場を離れることができなかった。従って二階へ上って喜助を慰問してやることは、当分のうち全く不可能であるといってよい。喜助は、いよいよ落着いて泣きつづけた。

だが、その快よい悲歎の泪を、ときどきチクリと止める何物かが夾雑していることに、喜助は気付かないわけにゆかなかった。それは何といいあらわすべきであろうか。早く言うなれば大熊老人の死に纏る莫然たる疑惑であった。

老人は何故こう脆くも死んでしまったのであろうか。

親族達は、老人が死ぬと直ちに一致協力して、別に何の特権もないことが判って居る喜助を邸外に抛り出したのであろうか。

更に、これは大秘密であるけれど、大熊老人は生前に於て、ひそかに喜助の手を借りて毒薬亜砒酸を常用していたが、それは多分、抗毒性の体質をつくりだすことにあったのであろうが、それは実際、老人にとってどんな役目を演じていたのであろうか。又、そのすくなくない亜砒酸常用の体質が、今度の死亡原因に、どのような関係があるのであろうか。

そんなことを、いろいろ綴り合わせて考えてゆくと、若しやという疑惑が、なんだか本当にそうあったらしく思われて来るのであった。親族連中が一致団結して事に当っているのもおかしいと言えば言えないこともないし、死亡診断書を書いたN博士だって、何か動機があれば、インチキ証明書を書かぬとは言えないだろうし、そう言えば、老人がこのたび死病にとりつかれたのに、主治医としてN博士とその助手が二人ほど診に来たばかりで、百万長者の生命を治療するのには、たいへん貧弱すぎたと考えられる。

（わかった、彼等一団の親戚たちは、一致協力して、あるまいことか大熊老人の毒殺を企てて、それが不幸にも見事に成功してしまったのだ。きっと、そうに違いない。自分を直ぐに室外につまみだしたのも、単に喜助という少年を嫌ったのではなくて、実は自分が薬学についての専門家であることに恐怖を感じて、排斥したものに相違ない）

喜助は、大きな泣き声を、いつの間にか、やさしい泣き逆吃に代えて、こんな想像をめぐらしていたのであった。彼は大きく肯くと、突然颯爽と畳の上に立ち上った。と思ったら、直ぐにペタンと、元の薄汚れに汚れた座蒲団の上へ、崩れるように坐りこんでしまった。（讐打ちをしても、何になる。死んだおじいさんが、生き返るわけじゃ無いし……）

喜助の心は、どこまでも弱く、そして悧巧であった。死んだ老人を甦らせる手のないのに、何をやっても駄目であるに違いなかった。殊に彼は薬学家として、毒物に対する肯定と尊敬とを持っていた。毒物にやられて呼吸中枢が止り、循環器官が停ると、もう一切のものは破壊へむかって展開するにきまっていると、原書で習った生理学の知識を思いうかべて、アーメンと小さい声で言った。彼が探偵小説の読者ではなかったことを、深く遺憾としなければならない。

その後に来るものは、無間地獄のような悲歎と寂寥とであった。喜助にはもう何事を望む気持もなかった。誰を待つことも考えられ

なかった。後半が脱落している書物の、その最後の一行を読みおわったような感じだった。そうなった上は、彼の行くべき道は、誰しもが選ぶたった一つ残されたその道――自殺ということであった。

喜助は自殺しようと決心した。

喜助にとって、自殺することは、障子に手をかけてガラリと開くのと、その容易さに於て余り大差がなく感ぜられた。自殺して、天国の門口で、（おお、とうとうお前も来て呉れたか）と云って老人の胸に抱かれることがどんなにか楽しみであった。彼は堅くそれが出来ることを信じていたのだった。喜助はここで、死ぬ時間のことを考えた。なるべく早く死にたい。老人の葬式が行われるその時間に後を追いたい。乃木大将のことなどが急に思い浮んできて、彼はいい気持だった。（さて自殺の方法であるが……）と彼は頤の尖端を指先でつまんで、脳髄を絞ったのである。一生の思い出となることだから、何とかこう、薬学家らしい堂々たる死に方をしたいと考えた。毒物を盃に盛って、一と息に飲み下だし、盃がまだ卓子の上に、帰らぬ前に既に呼吸が止っているという彼の青酸加里も、実に管々しい毒物には相違なかったけれども、それを実行した先輩も少くないので、独創を尊ぶ喜助の満足を得ることは出来なかった。それでは、毒草ストロファンツスを使うのはどうであろうか。これは研究所の標本室にあるのを覗いたことはあるが、こういう稀有な標本は、よろずインチキものが多い。もし死にはぐれたら大恥辱である。それでは――

（素晴らしい！　それだ！）

と思うような方法を突然思いついたのであった。彼は、金属ソジウムが水に会うと劇しく爆発する性質のあるのを利用しようと思った。その金属ソジウムは中々高価な薬品なので、多量は手に入らないのが普通であるが、幸にも研究所へは先頃三十キログラムほど納入され唯今彼の許で試験をすることになっているから、これを持ち出して使えばよい。彼はその金属ソジウムを一度に爆発させるため、別に溜めて置いた水を一時にザブリと懸けようと思った。しかも直ぐ爆発するのは困るから、或る一定時間すると、自然に水槽の底が外れて、ザブリと金属ソジウムにかかるようにしたい、それには、砂時計の砂を水に代えたような仕掛けにし、水が少しずつ上部の容器から下部の容器に落ちて溜ってくる、するとこの下部の容器を水洗便所の水槽のようにし、或る水量の水が溜ったところで底が外れるようにし、更にその下の第三層に一ぱい詰めこんである金属ソジウムの函にこの水が一度に懸るようにすればよい。

それに、これは全く奇想天外の名案だと思うが、この一切の装置を、お葬式に使う花筒のなかに仕掛けるのだ。どうせ、明日は、叔父の一家は総出でお葬式の手伝いに出かけてゆくだろうから、自分ひとりが留守番にのこることになろう。そのとき榊の花筒の一個を特別に残して置いて貰って（これ位の頼みなら、叔父叔母はたやすく叶えて呉れるにきまっている。いけないと云えば、金を出して買いとることにしてもよいではないか）これを身体の傍に立てて置き、丁度よい時間に爆発させる。

すこし心配になるのはその爆発の力であるが、無論自分を殺すのには充分であろうが、炸裂力は必要以上に劇しくて、ひょっとすると、この花久の店を粉微塵に吹きとばしてしまうかもしれない。これは叔父叔母に対して申訳のないことである。だがまァいいや、大したことはあるまい。

喜助は、目に見えて、急に元気づいて来たのだった。

四

花久の店には、静かに黄昏（たそがれ）の淡い光が漂っていた。そのうすぐらい土間のうちは、広々と綺麗に片付けられてあったが、その中央とおぼしきあたりに、一台の大きな花筒が立っていた。そしてその花筒のすぐ後に、小さい台を据えて喜助がチョコンと腰を下ろしていた。こちらから見ると、喜助は、なにかしきりに耳を傾けて物音を聞いているらしい様子であった。

「……」

ポトリとも何とも音はしなかった。

喜助はハァと溜息をついた。

しかし、又耳を筒の方へ近づけた。今度は何か微（かす）かな物音がきこえるらしい。喜助はゴクリと唾を呑みこんだ。そうしたら、今までしていたと思った物音が、パッタリしなくなった。耳の加減らしい。

喜助は、更にまた大きく、ハァーと溜息をついた。

太い青竹でこしらえた花筒の表面に眼を近づけて丁寧に調べてみた。もう金屬ソジウムが水分を引いて発熱し、竹筒の青い色がすこし変ってきては居ないかと思ったのであるが、別にまだ異状は認められなかった。

喜助はこの爆発装置の設計に、欠点があったのに気がついた。何故もっと大きい滾（こぼ）れ孔（あな）を作って置いて、筒の外から、こう耳を近づけると、ポトリポトリと上部洞から、下部洞へ水の落ちてゆく音がよく聞えるように作らなかったのであるか。このように孔が小さくては、爆発の刹那まで水滴の落ちる音はしないかも知れない。それでは唐突に爆発することになる。これは気が気でないぞ、と考えると、背筋が急に冷くなって、身体がガタガタと細（こまか）く震えだした。

時計を出してみた。予定の爆発時間までは、もうあと五分しかない。だが五分間あると思って落ちついていることは許されないのだ。すこし位のことは計算の誤差で、後や前になるかも知れないのだ。もう目を閉じて、神に祈りを捧げるのがよい頃合であろうか。

喜助は、口を大きく開いて、苦しそうにハァハァ喘ぎながら、竹筒の表面から寸時も眼を放たなかった。式場の青山斎場では既に読経が始まっている頃であろう。死におくれては一大事である。

喜助はもう眼を開いて居られなかった。彼は腰掛けの台を後ろに蹴とばすと、矢庭に大榊の花筒にシッカリ抱きついた。彼はハァハァと息を切り、額から脂汗をタラタラと流した。彼は讃美歌を、声も無く、歌っていた。

しかしどうしたわけか、喜助の注文どおりに中々爆発は起らなかった。最初に算出した定刻を五分十分と過ぎて行ったが、彼の腹部もまだ安全であった。喜助はすこし調子ぬけがしてきた。そのときであった。

「ガラ、ガラ、ガラッ！」

やられたッ、と喜助は思った。が少し音の出どころが違うようである。ハッと思って眼を開いてみると、これはどうしたことか、閉めてあった筈の入口が開いて、叔父の久作が、顔色をかえて彼の前に立ちはだかって、口をモグモグさせながら、両手を意味なく頭の上で振っているではないか。

（叔父が帰って来た。大急ぎでとってかえしたのだ。とうとう自分

の自殺を嗅ぎつけたのだ。この方法は失敗だッ）

喜助は突嗟に、そう考えてしまった。こうなる上は仕方がない。叔父たちに自殺を押し止められるよりは、電車に轢れた方がましだ、と思った喜助は、いきなり叔父を土間の上につき転がすと、裏口を開いて、真暗な往来へ飛び出した。

踏切の方へ！　線路へ！

其の日の斎場の光景は、まことに厳粛を極めたものだった。何しろ、実力に於て首相格である大熊老人の葬儀のことであるから、上はA総理大臣をはじめとし、閣僚全部を筆頭に、朝野の名士という名士、その数無慮五百名、それに加えて、故人の徳を慕う民衆の参列者が一万人に近いという話であった。斎場の正面のずっと高い石の壇上には、大熊老人の亡骸を安置しその下には、各名士から贈られた真榊や、花筒や、花環がギュウギュウ言うほど、おし並べられ、まるでアマゾン河畔の大森林を此処に移したかの感があった。棺の前には、薄紫の香煙が、濛々と館の内部を垂れこめていた。右の榊の前には、各大臣、議長、将官などが眩ゆく整列し、左の榊の前には例の大熊老人の親戚の一団が、今日の光栄に得意然たる面持で、目白押しに並んでいた。

棺の正面に今日の導師たる××国師はじめ一門がずらりと並び、一と通りの読経も漸く終りに近づき、南無阿弥陀仏の連唱が行われていた――その時であった。

（プスッ）というような鈍い物音が大臣席のうしろの方にした、と思ったら、その次の瞬間に、「ド、ド、どーんッ！」と物凄じい大爆音が起った。

あとは何にも判らなかった。

五分、十分……やや静まった。門外に居た参列者だけは、重症を負いながらも、一命はとりとめたようである。その連中が門内を覗きこんで、一種異様な臭気を持った煙の霽れゆく間から本堂のあたりと覚しき跡に眼を移したものは、思わず、

「吁ッ」と叫んで、顔をそむけた。

門内に居た五百人の親戚や名士達は一人として生きては居ないらしい。その惨状を、ここに記すのは、筆者としても到底忍び得ないところである。

それから三十分経った。

恐るおそる本堂の跡へ入りこんだ警官隊の一行は、本堂の正面にある石の壇上と覚しいところから、おゥ、おゥと叫ぶ人声のあるのに気付いて、胆をつぶした。よくみると、それは無惨にも片足を失った重傷者が、救いを求めているのであった。それを皆が寄って、ようやく下へ降ろして見て再び大吃驚をしなければならなかった。というのは、その片足のない重傷者は、その日、葬儀をした筈の大熊老人その人に違いなかったから……

後で判明したことは、大熊老人は毒殺されたが、平常の抗毒方法がうまく効いて、棺の中に居るうち段々恢復してきた。ところへ、あの大爆発が起って、身体の大部分は石段の蔭になっていたので微傷もうけず、唯足だけは爆発瓦斯のため吹きとばされ、その一本を失った。足が一本千断れた疼痛が、ハッキリ老人を蘇生へ導いてくれたのであった。老人の死を計画した親戚一同は、花久が、混雑に紛れて式場へ担ぎこんだ喜助の仕掛けた爆発性大榊のために、一致協力して冥途へ旅立ち、皮肉にも大熊老人一人が生きのこった。

喜助はどうなったか。久作が椿事に遭って生命からがら帰って来たのを感ちがいした喜助は、初一念を貫いて、あれから直ぐ後で、鉄路の露となって消えてしまった。

（「探偵」一九三一年七月）

青空文庫情報

底本：「「探偵」傑作選　幻の探偵雑誌9」光文社文庫、光文社
　　2002（平成14）年1月20日初版1刷発行
初出：「探偵」駿南社
　　1931（昭和6）年7月号
入力：川山隆
校正：伊藤時也
2008年11月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

仲々死なぬ彼奴

海野十三

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/